

歯科衛生士

THE JOURNAL OF DENTAL HYGIENIST

<http://www.quint-j.co.jp/>

2011年11月10日発行 毎月10日発行(通巻418号)
第三種郵便物認可1977年8月25日 ISSN 0011-9874



連載 ステージ別に学習できる!

新人ステージ 新人歯科衛生士の基礎知識と実務

キミかゆいところに手が届くね!「見よう!聞こう!言おう!」からはじまる
できるアシスタントワーク

患者さんとの会話 自分の苦手なココを克服

初級ステージ 新人からアシスタントまで

ヒントとともに学ぶ
オーバーインスツルメンテーションに
なってしまう3つの理由

教科書には載っていない
縫合アシスタントワークのあのワザこのワザ

中級ステージ アシスタントから歯科衛生士まで

私たちが守ろう!
子どもの健康 子どもの生活

Q & Aで理解する義歯ケア
~長く快適に使用してもらうためのヒント集~

上級ステージ 歯科衛生士から歯科医師まで

健康な高齢者の生活を知る

介護&医療現場のデビュー前に
キーワードで理解する多職種協働のツボ

特別企画

これは使える!
**小児の歯科保健指導に
役立つ・生かす
15の食育知識**

2011
Vol.35

11

わたしの Hygienist Road

ハイジニスト
ロード



松尾 円さん

実力と謙虚さを備えた歯科衛生士

同じ仕事に10年以上も従事していれば、自然と自信が表にあらわれてくるもの。しかし「自分はまだまだ」と言うのは、松尾 円さん・16年目の歯科衛生士である。

そんな彼女が勤務する浪越歯科医院(香川県、浪越雄男院長)は、香川県西部の山と海に囲まれた自然豊かな地域に位置する。その地域で同院が特に力を入れているのが、う蝕予防だ。

たとえば、フッ化物配合歯磨剤・歯面塗布剤・洗口剤の応用をあらゆる世代の患者に勧めることはもちろん、近隣の小学校や幼稚園にもはたらきかけを行っている。同院の7人いる歯科衛生士が、それぞれの学校のクラスや幼稚園等を担当し、昼休みの時間を利用して毎月ブラッシング指導に訪れているのだ。

このような積極的なう蝕予防への取り組みは、松尾さんが入局した年からスタート。もともとは浪越院長の指示に歯科衛生士が追従する形であったものの、現在では取り組みの効果を歯科衛生士自身が肌で感じている。松尾さんは中でもフッ化物洗口の効果は明らかだと言う。

「中学までフッ化物洗口を継続して行っていたのが、高校生になると行われなくなる。生活習慣も大きく変わり、メンテナンスが途絶えがちになってしまい、再来院したときにう蝕ができてしまっていると心が痛む」

松尾さんは、健康な口腔が失われてしまうことを残念がると同時に、「環境が変わったとしてもメンテナンスに来てもらえる力が、歯科衛生士に求められているんですね」と、自分の力不足を嘆く。

とはいえ、松尾さんをはじめ同院が地域に貢献してきたことは明確である。今年、近隣にある仁尾小学校8年生(51名)のDMFTが、なんと「0」になったのだ。それでも彼女が驕ることはない。「せっかくの0を維持していくために、私がいちばん力をつけたいとだめですね」と、あくまでも謙虚な姿勢の松尾さんである。

MADOKA MATSUO

浪越歯科医院(香川県)

1998年瀬戸内総合学院歯学科卒業。同年、浪越歯科医院に勤務。2003年、2008年に出産のため一時的に職務から離れるが3ヵ月で復帰。現在に至る。NDL ミントセミナー認定クリニカルハイジニスト(プラチナ)、日本歯病学会認定歯科衛生士。

いつか、自分から何かを発信していきたい

次のステップは、教えるスキルの習得

本来は人見知りで、集中できる細かい作業が好きなタイプ——松尾さんは自分のことをこう表現する。SRPなどのこまごまと手を動かす作業を得意とし、重度の歯周病患者の理直になれば、腕をふるいたくなるという。とはいっても歯科衛生士である以上、人見知りであっても仕事ができない。また手もとだけに夢中になり、広い視野で全身をみるができなければ、歯科衛生士としてもバランスを欠く。そのことを十分に認識しているからこそ、「こんな自分だから、仕事ではプロの顔になるよう努めている」と松尾さんは言う。

これまでプロとして患者に接するために、多くの知識の習得や技術のスキルアップに熱心に取り組んできた。日本歯周病学会認定歯科衛生士も取得した。患者さんの治っていく過程が見られることが自分の勤めになり、さらにスキルアップにつながった。そんな彼女が今苦手としているのが、人へ教えること。「自分で歯石を取れても、どう取るかを伝えることは難しい」と言う。

昨年、淡城院長らが中心となって I.T.S. (Innovation Treatment in Shikoku) というスタディグループを立ちあげた。カリオロジーとペリオドントロジーを基礎とし、歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士がともに学び、歯科医療を追究していくというスタンスのもの。四国および岡山県から12の医院が参加して研鑽が始まった。

「これまでは医院同士での交流があまりなかったため、同じ地域の医院のようすがわかるのはいいですね」と



淡城歯科医院の医々。

松尾さんは言う。その一方でグループ内のほとんどの歯科衛生士は松尾さんよりも経験が浅いため、後輩育成をも担う彼女にはプレッシャーとなっている。ただ見方を変えれば、教えることが苦手な彼女にとっては、ここが新たなステップアップの場なのかもしれない。

インタビューの間、終始控えめだった松尾さんは、最後に「院長がつねに率先してやってきた。自分は提案していくべき立場なのに」と胸に秘めた思いを語った。結婚後、家族や子ども優先の生活。自分のことがどうしても後回しになってしまうため、仕事上で無責任な行動や発言ができないのだという。今もそんな状況下にあるが、「できる限りのことをし、いつか自分から何かを発信したい」と、熱い松尾さんを見せてくれた。



●奇跡のリンゴ 著＝石川拓治 (幻冬舎)

わたしの MUST BOOK



不可能と叫びわかれた無農薬、無肥料でのリンゴの栽培の実現に向けて奮闘してきた、木村拓治さんの人生について書かれた本です。その取り組み姿勢に引き込まれ、人の生き方や自然のあり方をあらためて考えさせられました。「ひとつのものに狂えば、いつか必ず替えにめぐり合う」——この言葉が印象的でした。